



# 住民投票条例案 今日採決

子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会

事務局 048-0401 寿都郡寿都町字新栄町 101-6

TEL/FAX : 0136-62-3630 kakugomino@gmail.com

<https://www.facebook.com/106569234530018/>

No.12 2020年11月13日発行

## 【住民投票条例案は今日採決】

町民の会共同代表が直接請求した「寿都町における特定放射性廃棄物最終処分施設建設地選定に関する文献調査への応募に関する住民投票条例案」について、11月11日(水)に町長が議会に提出しました。そして、今日13日(金)、いよいよ採決されます。

核のゴミの最終処分場の文献調査は、いま生きている私たちの子どもだけにとどまらず、その子ども、また、その子どもと関わっていくことになるかもしれない大きな問題です。応募にあたっては、住民の意見を聞いて決めるべきなのです。

町議の皆さん、住民投票条例案への賛成をお願いいたします。あなたに投票した支持者の声を聞いてください。町民の皆さん、議員一人ひとりがどんな判断を下すのか、注目していきましょう。

## 【情報公開審査会の判断は「公開しない」】

町議会全員協議会で、片岡春雄町長が問題発言（「町民に伺いを立てたらかえって面倒になる」）をしていたというNHKのスクープ報道が9月18日にありました。それを受けて、私たちは、議会全員協議会の議事録の公開を求めて行いましたが、結果は非開示（公開しない）でした。そこで、審査を申し立てていたところ、11月10日に情報公開審査会が開かれました。当会から、請求者本人ほか5人が傍聴に行きました。

町民の知る権利を保証した寿都町情報公開条例に基づいて行われた審査会です。当然、公開という判断になるのだと思っていたのですが、委員は、開示2人、非開示2人に分かれ、最後は委員長の判断で非開示と決定しました。

傍聴していた私たちの目には、審査会の進め方が奇異に感じられました。まず、会が始まる前に、片岡町長が現れて、挨拶し、退席の際に「お手柔らかに」といったふうに委員長に声をかけていきました。そして、審査会が始まると、開示するべきだという意見が出るたびに、委員長は事務方の役場職員の顔を伺うのです。委員長として堂々と議論を仕切ろうという気概がまったく感じられませんでした。

ひとりの委員は「議事録のことはすでにNHKでも報道されており、核のために町は二分化している。みんなが色んな不信感を持っているなら、開示した方が良いのでは？」と開示を支持しました。もうひとり「町民の投票で議員になっている人たちなんだから、町民に公開するのが本来あるべき姿だ」と開示を支持

しました。

非開示を支持した委員のひとり「将来、開示してもよいが、いまは非開示とするべき」と述べました。もうひとりが理由を一切述べることなく非開示を支持したために、2対2となり、結論は委員長に委ねられました。委員長は、まさか自分の判断で決まることになるとは思っていなかったという態度で、「どうしよう。困った」とつぶやき、理由を述べることなく「非開示」と明言しました。

非開示と判断するのなら、納得いく理由を述べていただきたいかったです。町長や役場への付度が働いているのかと考えざるをえませんでした。開示請求理由について具体的な反論が行われずに非開示判断が下され、悔し涙を流す者もいました。町民の知る権利が認められなかったことは残念でなりません。しかし、公開すべきと意見を述べられた委員がおられたことは、民主的な行政運営や議会運営を求める点でとても有難いことです。反対に、公開しないとされた委員の方々は、これからの町を担う子供たちや寿都町の未来に対して、大きな判断をしたのですから、これから将来にわたって責任を負っていただくことになります。

一連の情報公開請求はこれで終わりとなります。透明で民主的な開かれた議会運営や行政運営にかかる情報公開を求めて、今後は裁判に訴えるかどうか。お金も時間もかかることですので、簡単には踏み切れませんが、あらゆる法的手段を駆使することを検討していきます。

## 【寿都町は実際に最終処分場として有望だ？】

11月3日にSTVで放送された「どさんこドキュメント 核のごみは問いかける」で衝撃的な発言が流れました。政府関係者が次のように言っているのです。

**「北海道は土地が広くて、ほかの自治体との距離を保てる。寿都町は実際に最終処分場として有望だ」**

政府関係者といっても、どこの役所の人間なのか、その素性は明らかにされていません。しかし、東京だけしか知らない官僚が言ったのでしょうか。

この発言は何を意味していると思いますか。私たち北海道に住む者は、津軽海峡をはさんで南を「内地」と言っています。内地に住む人間にとって、「北海道は遊びに行くところ。北のはずれの島なので、邪魔モノを処分するにも、とても都合がよいところ。寿都なんて聞いたこともない町なら、なおさら都合がよい」のでしょうか。

私たちが生まれた町、子どもを育てている町、仕事をしている町、うだる暑さの中で町民が協力して担ぐ神輿が渡御する町、笑ったり泣いたりして大事にしてきた町、そして骨をうずめるであろう町が、政府関係者には、「最終処分場として有望」な町としか考えられていないのです。

「文献調査だけでカネを持ち逃げしよう」「概要調査までならいいか」「20億に70億でかいぞ！うちにも仕事が回ってくる」「片岡に任せておけば悪いようにならない」などと考えていると、どんな目にあうかわかりませんよ！

文献調査への応募は、いまや、片岡町長一人が決めた問題ではなく、核のごみ受け入れの入り口の扉を開けることに協力する役場職員、議員、各委員会の一人ひとりの問題になっています。毎日ランドセルを背負って登校する子どもたちが見えていませんか？ あの子たちの未来に責任を負うのだと自覚してください。

